

1 1	海部	あま市立伊福小学校	マツモト タカユキ 名前 松 本 高 幸
分科会番号	7	分科会名	美術教育

研究題目

おもいをもち、主体的に制作に取り組む児童の育成
 －「出会い・考え・伝え合う」鑑賞活動を通して－

研究要項

1 はじめに

本校では、令和6年度から「おもいをもち、主体的に制作に取り組む児童の育成」を研究主題に掲げ、SST（ソーシャルスキルトレーニング）とSGE（構成的グループエンカウンター）の手法を取り入れた活動（本校では「しっぴートーク」と呼んでいる）で培った素地を生かした図画工作科の授業研究に取り組んでいる。

研究1年目は、「深い学びを促す対話的活動を通して」を副題とし、「題材との出会いの工夫」や「中間鑑賞」を取り入れた鑑賞活動の実践に取り組んできた。研究2年目は、1年目の研究を土台に「つくる喜びを感じる鑑賞活動を通して」を副題とし、ICT機器（タブレット端末の動画機能）を取り入れた鑑賞活動の実践に取り組んできた。これらの研究を通して、児童は友達と関わり合いながら制作活動や鑑賞活動を行うことにより、興味・関心をもって主体的に取り組み、作り出す喜びを味わうことができるようになってきた。

しかし、実際の制作の場では、周囲と自分を比較してしまい、「上手・下手」という技能だけの基準にとらわれ自信をなくしたり、「失敗したくない」という気持ちから自分のおもいを表す前にあきらめてしまったりする児童もいた。また、自分自身の内なる「おもいや願い」を表現することをためらい、教師や友達からのアドバイスやインターネット上の参考例を「正解」とし模倣してしまう児童もいた。これは、自分の感覚を信じる経験が十分に積まれていないからだと考える。

そこで本年度は、「出会い・考え・伝え合う」鑑賞活動を通して、という副題のもと、児童が自分の感覚を信じて表現する力を育んでいきたいと考えた。そして、これまでの「しっぴートーク」と「ICT機器」を用いた授業研究を継承しつつ、鑑賞を単なる「みる活動」ではなく、「次の表現意欲を生み出す活動」として位置付けることで、「鑑賞」と「表現」をより密接につなぎ、主体的で深い学びにつながる「学びの循環」を生み出したいと考えた。

鑑賞と表現は表裏一体の活動であるため、鑑賞活動を通して、他者の作品と深く出会うことや、自分自身の作品を改めて振り返ることは、児童にとって「表現には様々な形があり、そこに込められたおもいや願いも多様である」ことを知る足がかりになると考える。そこで、「正解は一つではない」という事実を実感させることが、「自分のやり方で表現していい」という自己表現への心理的な安心につながり、次への制作意欲にもつながると考える。

本実践を通して、自他の表現のよさを認め合い、自らの感覚を信じて「おもい」を表現する喜びを知ることで、より主体的に制作に取り組むことのできる児童を育んでいきたい。

2 研究の方法

(1) めざす児童像

自他の表現のよさを認め合い、自らの「おもい」を表現する喜びを知り、主体的に制作に取り組む児童

(2) 研究の仮説と手だて

【仮説】 「出会い・考え・伝え合う」鑑賞活動を通して、表現の多様性に気付くことができれば、児童は安心して自分の「おもい」を主体的に表現するようになるであろう。

手だて①・・・「出会い」の工夫～表現への動機づけ～

児童が主体的に制作に取り組めるようにするために、教科書や画面越しではない「本物」と出会う場を意図的に設定し、児童の感性に働きかける。

手だて②・・・「考え」の工夫～新たな視点の気付きと思考の可視化～

児童が表現について考える力を育むために、「この色にわくわくする」「この材料すてきだな」といった児童の感覚を大切にしつつ、色や形、材料、配置などの造形的特徴に着目する視点を与え、ワークシート等を活用して思考の可視化を図る。

手だて③・・・「伝え合う」の工夫～他者の視点を取り入れる中間鑑賞～

児童が主体的に表現を追究できるようにするために、制作途中に中間鑑賞の場を設定し、多様な捉え方に触れることで、新たな表現方法への気付きや表現の多様性を実感し、自己の表現を広げるための「引き出し」を増やす。

3 研究計画

(1) 対象学年 全学年

(2) 計画予定

10月～2月	研究教科の検討・基盤となる授業実践（昨年度の実践）
4月	研究内容の検討
5月	授業実践、授業検討会
6月～7月	授業実践、授業検討会
7月	授業実践の分析
8月	中間検討
9月～2月	授業実践、授業検討会
3月	研究のまとめと今後の課題

4 研究の実際と考察

(1) 2年生の実践「草花のおしゃべり」

2年生では、児童の「自分も表現してみたい」という意欲を高めることを目指し、図画工作科の「草花のおしゃべり」と国語科「うれしいことば」、生活科「大きくそだてわたしの野さい」を関連付けて授業を行った。表現の対象には、児童が育てている野菜を取り上げた。栽培活動を通して、日々世話を重ねる中で育まれた野菜への愛着やおもしろ入れを生かすことで、児童が対象をより深く見つめ、自分の「おもい」を豊かに表現できると考えたためである。

授業の導入では、児童が対象（野菜）を詳しく観察しようとする気持ちを促すために、まず学年園の野菜の写真を提示し、「この野菜が心をもっていたとしたら、どんな性格かな？」と問いかけ、野菜を擬人化させてから活動に入った。児童は、形や色から受ける印象をもとに想像を膨らませながら、野菜の写真に顔やセリフを書き加え、野菜たちの「おしゃべり」を具現化していった。キュウリを育てている児童は、キュウリに髪や目、口を描き、「みんなみたいに大きくなりたいな」というセリフを書き加えた。ナスを育てている児童は、髪や目、口に加えて、耳も描き「はやく食べてほしいな」というセリフを書き加えていた。児童は、野菜と対話することを通して、「キュウリが大きく育ってほしい」「早くナスを食べたい」という自分の「おもい」を作品に重ねることができた。



【資料1】ICT機器を通して友達と「おしゃべり」をする様子



【資料2】「おしゃべり」の作品

授業の展開では、他者の表現や発想に触れることを通して、自分とは異なる見方や考え方に気付かせたいと考え、ICT機器（ロイロノート）の「送る」機能を活用し、友達が想像した「おしゃべり」に対して「返事を書き加える」という双方向の活動を取り入れた【資料1】。「みんなみたいに大きくなりたいな」とキュウリに吹き出しを付けた児童の作品には、友達から「ぜったいになれるよ」と返事が書き加えられて届けられた【資料2】。児童は、自分がキュウリに込めた「大きく育ってほしい」という願いに共感してもらえたことで、うれしさや安心感をもつことができた。また、2本並んだナスに「そのぼうしかわいいね」と吹き出しを付けた作品に対して、友達がもう一方のナスに「きみのほうがかわいいよ」と返事を付け加える様子も見られ、友達の発想が加わることで児童の作品の世界が広がり、作品同士が会話を交わすような物語が生まれるきっかけとなった。

(2) 4年生の実践「コロコロガーレ」

4年生では、児童が、新たな表現の視点や方法に気付き、表現の幅を広げるための「引き出し」を増やすことを目指し、「コロコロガーレ」の授業を行った。そして、制作途中において「中間鑑賞会」の時間を設け、友達の作品の造形的よさを見つけて伝え合い、自分の作品の進化に生かすことができるようにした【資料3】。事前に児童一人一人にICT機器を用いて、「ビー玉が転がる様子」の試走動画を撮影させた。そして、中間鑑賞会では、動画で見た「ビー玉が転がる動き」と実物の作品を見比べながら鑑賞する活動を行った。



【資料3】中間鑑賞会の様子



【資料4】コロコロガーレの作品

試走動画を見た際に「ビー玉が一瞬見えなくなるわくわく感が楽しい」と感じた児童は、実際にその作品を見ることで、ビー玉が一瞬見えなくなる現象は、トンネルや飾り、コースの構成によって生み出されていることに気付くことができた【資料4】。また、ビー玉の転がる

スピードの変化に疑問を感じた児童は、実際にその作品を見ることで、傾斜やコースの形状によってビー玉の転がる速さに変化が生まれることに気付くことができた。動画と実物を関連付けて鑑賞することで、児童は材料の使い方やコースの傾斜、仕掛けなど、動きを生み出すための様々な工夫や表現の方法を主体的に見つけ出すことができた。また、ビー玉が転がる様子を生かした友達の多様な表現に触れることを通して、「もっと面白い動きをつくりたい」というおもしろが高まり、自分の作品をよりよくするためのヒントを見つけようとする意欲も芽生えた。中間鑑賞会では、児童の気付きを教室全体で共有する場も設けた。友達から自分の作品のよさを認められたり、多様な表現のよさに触れたりすることで、教室全体に「自分のおもしろを、自分らしい表現方法で表してよい」という安心感が生まれ、その結果、児童は自分の「おもしろ」を大切にしながら、主体的に作品づくりに取り組むことができた。

(3) 6年生の実践

ア 「ここからみると」の実践

6年生では「出会い・考え・伝え合う」のサイクルを確立することを目指し、「ここからみると」と「わたしの大切な風景」を関連付けて授業を行った。

「ここからみると」の題材の導入では、「出会い」の場を充実させるため、画家を講師に招き、植物を描く出前授業を実施した。画家が描く生命力あふれる植物の絵の豊かな色彩や自由な筆使い、本物の作品ならではの迫力に触れることで、児童の感性が刺激され、「自分も自由に表現してみたい」という意欲を高めることができた。また、画家から作品に込めた「おもしろ」を聞き、「自分らしさ」を大切にすることを学んだ。その後、児童は作品との出会いから得たインスピレーションを基に、グループで2m×10mの巨大なボール紙に植物を描く共同制作を行った。互いのおもしろや表現を受け止め合いながら、手形や筆を用いて色鮮やかな草木を大胆に描き込むなど、他者の評価を気にすることなく全身を使ってのびのびと描き、自分の「おもしろ」を表現することができた【資料5】。



【資料5】巨大キャンパスに植物を描く様子

さらに、完成した作品を校庭のどこに、どのように置くと面白く見えるかという視点で話し合い活動も行った。児童は校庭の景色を思い浮かべながら、岩や茂み、木々などの特徴に合わせて巨大な作品を切り分け、「ここを斜めに切れば、あの木の下にぴったり合う」「この形なら岩と一体に見える」など、自分たちの「おもしろ」と自然環境を結び付けることができた。

切り分けた作品は、実際に校庭へ持ち出し、岩の形に沿わせて置いたり、木に立て掛けたりするなど、それぞれの「おもしろ」を生かすことができる場所を選んで展示し、ICT機器（タブレット端末）で撮影した。

撮影した写真の相互鑑賞会では「（作品を）置く場所を変えるだけで、いつもの校庭が全く違う素敵な場所に見える」「同じ作品でも、置く場所を変えると見え方が変わる」などの感想をもち、互いの作品やその見せ方を伝え合うことを通して、児童は多様な見方や感



【資料6】校庭で作品の置き場所を撮影する様子

じ方に触れることができた。また、日常の風景を新たな視点で捉え直し、身近な環境の中にも美しさや面白さがあることを知り、自分の「おもい」と重ねながら表現する喜びを味わうことができた【資料6】。

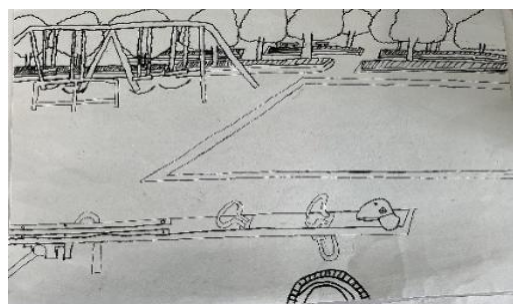
イ 「わたしの大切な風景」の実践

「わたしの大切な風景」では、前題材「ここからみると」で培った見方・感じ方を土台とし、単に景色を写生するのではなく、6年間過ごした学校生活の中から「思い入れのある場所」を選び、その場所に込めた「おもい」を主体的に表現することを目指して授業を展開した。その際「出会い・考え・伝え合う」のサイクルを継続的に働かせるため、『わたしの「おもい」発見・進化シート』を活用した【資料7】。

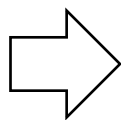
題材の導入では、「出会い」の場として名画を鑑賞し、構図や色彩、遠近感など、画家が「おもい」を表すために用いた技法を分析する活動を取り入れた。児童は名画の表現の工夫と、自分が描きたい風景や自分の「おもい」と結び付けながら、「自分ならどのような工夫ができるだろう」と考え、表現への見通しをもつことができた。

下描きの段階で行った中間鑑賞会では、まず自己の作品を見つめ直させるために「①構図」「②表し方」「③色」「④奥行き」の4つの視点を児童に提示し、「(自分は)構図を工夫して描いた」「奥行きを意識している」など自身の表現を客観的に振り返らせた。そして、ICT機器(タブレット端末)で友達の制作過程を記録した動画を視聴し、実際の下描きを鑑賞する活動を行った。制作過程(動画)のシーソーを描いた作品に添えられた「帽子」に着目した児童は、「さっきまで遊んでいたような、人の気配が感じられる温かい雰囲気を表したかった」という友達の「おもい」をくみ、実際の作品の下描きと動画を見比べていた【資料8】。そして、友達との会話を通して、自分のくみ取った「おもい」と友達の表現に込められた「おもい」が同じであることを知り、自分が描いている体育館の犬走りの風景に「ランドセル」を描き加えた【資料9】。中間鑑賞会を行うことで、児童は自らの表現をよりよくするためのヒントを見つけ、自分の作品に生かしていくことができた。

【資料7】わたしの「おもい」発見・進化シート



【資料8】シーソーの上に帽子を描いた絵画作品



左の友達
の作品を
参考に



【資料9】犬走りの風景にランドセルを書き加えた絵画作品

5 研究の成果

本研究では「出会い・考え・伝え合う」鑑賞活動を題材に位置付けることで、児童が表現の多様性に気付き、自分のおもいや感覚を大切にしながら主体的に表現することを目指して実践に取り組んできた。そして、次のような成果が見られた。

手だて①「出会い」の工夫として、2年生では、生活科の学習と関連付け、自ら育てている野菜を表現の対象とした。児童一人一人が日常的に関わる野菜を改めて深く見つめることで、対象への「おもい」を豊かに表現することができた【資料 10】。6年生では、画家を講師として招き、作品に込められた「おもい」や技法を直接聞く機会を設けた。迫力ある作品との出会いを通して、児童はインスピレーションを大切にし、次時の共同制作に意欲的に取り組む姿が見られた。



【資料 10】「おもい」を表現した作品

手だて②「考え」の工夫として、4年生では、中間鑑賞会を行うときに、事前に撮影したビー玉の試走動画を視聴する時間を設けた。そして、作品の色や形、模様に加え、ビー玉が転がる道の形状や傾斜にも着目できるように視点を示した。「ビー玉が速く転がるようにしたい」など、自分の「おもい」をより実現するためには、作品にどのような工夫を加えるとよいのかを考え、改善点を見いだすきっかけとなった。6年生では、『わたしの「おもい」発見・進化シート』を活用し、構図や奥行きなどの視点から表現を振り返らせたことで、自分の表したい「おもい」を再認識し、表現の意図を深く捉える姿が見られた。



【資料 11】中間鑑賞会の前と後の作品の変化

手だて③「伝え合う」の工夫として、4年生では、中間鑑賞会を行うときに、試走動画と実物作品を見比べる活動も行った。友達の作品の工夫に気付き、それを自分の作品に生かそうと、自分の「おもい」を大切にしながら表現を見直したり改善したりする姿が見られた【資料 11】。6年生では、制作過程の動画と作品を見比べることで、構図や色の濃淡など多様な表現の違いに気付き、友達の工夫を参考に自分の作品へ生かす姿が見られ、次への制作意欲につながった。

以上のことから「出会い・考え・伝え合う」鑑賞活動を題材に位置付けることで、児童は表現の多様性に気付き、自分らしい表現を取捨選択し主体的に追求する姿が見られた。また、互いの表現を認め合う対話を積み重ねることで、安心して作品づくりができる学級の雰囲気が育まれた。そして、自己肯定感や表現活動への意欲の向上につながった。

6 今後の課題

本研究では、「出会い・考え・伝え合う」鑑賞活動の実践にあたって、3つの課題が残った。1つ目は、友達の作品との出会いを、自分らしい表現へとつなげる支援の充実である。友達の表現のよさを、自分の「おもい」や題材と結び付けて再構成できるよう、発問や個別支援をさらに工夫する必要があった。2つ目は、ICT機器やワークシートの効果的な活用である。思考の可視化には有効であったが、蓄積された記録を評価や指導へ十分に生かすことができなかったため、活用方法をさらに検討していく必要があった。3つ目は、鑑賞活動と制作活動の時間配分の工夫である。思考の言語化と制作活動のバランスを見直し、十分な制作時間を確保できる授業改善が必要であった。今後は、これらの課題を踏まえ、「出会い・考え・伝え合う」鑑賞活動の学びを図画工作科だけでなく他教科や学校生活にも広げながら、児童一人一人が主体的に表現する力を継続的に育む授業づくりに取り組んでいきたい。